

2018年10月25日（木）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 鋏形蕙齋のお墓参り

1, 蕙齋のお墓へ

山村浩二さんは、ないじえる芸術共創ラボのワークショップを通して、日本では“夢”をどのように捉え、どのように表現してきたのかについて考えるとともに、江戸時代中後期に活躍した^{くわがたけいさい}鋏形蕙齋（明和元年～文政7年〈1764～1824〉）の画業に注目しておられます。

山村さんが現在創作しておられるアニメーション「ゆめみのえ」は、蕙齋筆の絵手本『略画式』シリーズや、同時代に活躍した上田^{あきなり}秋成の読本『雨月物語』^{むおう}「夢忘^{りぎよ}の鯉魚」（安永5年〈1776〉刊）をモチーフとした作品です。

山村さんは蕙齋の画力や描く対象への目線を高く評価しておられ、たとえば動物を簡略な筆致で描いた『鳥獣略画式』（1797年刊）を模写する際には、蕙齋の目線になりきって、優しい気持ちで動物を描いておられるそうです。

今回は蕙齋のお墓を訪問してご挨拶しようと、山村さん・入口敦志先生（当館教授）・木越俊介先生（当館准教授）・有澤で連れだつて出かけました¹。

¹ 日本文学研究において、お墓や過去帳の調査は、伝記研究において重要な手続きのひとつと考えられています。

2, 拓本をとる観察する

蕙齋のお墓は、東京都中野区の密蔵院（165-0025 中野区沼袋 2-33-4）というお寺にありました²。

ご住職に案内していただき、まずはお花を供えて手を合わせます。



他家のお墓に交じってひっそりと存在し続ける鋏形家のお墓。先祖代々の名前を記した墓石の上に唐風の屋根がつき、土台には大き

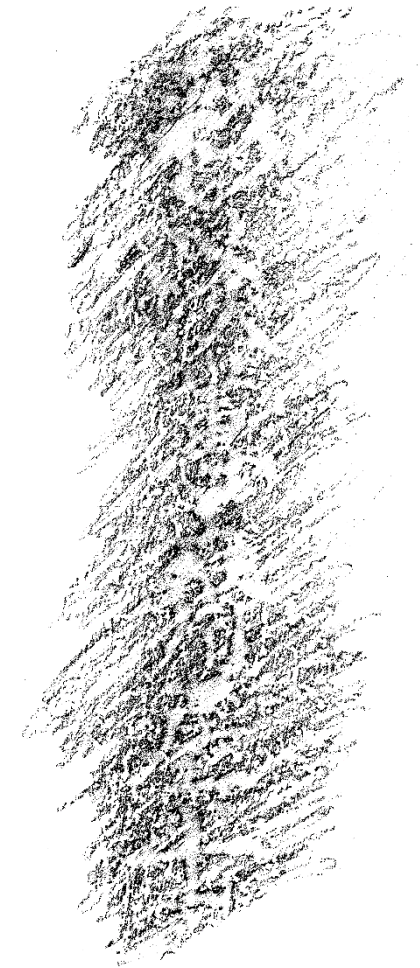
² 事前にお寺のご住職へ訪問のお願いをしております。

2018年10月25日(木)

く「鋏形」と彫られておりとても立派な佇まいです。



残念ながら墓石が摩耗していて、彫ってある文字が読みにくくなっていたのですが、光を当てて影を濃くしたり、紙の上から鉛筆で薄く色をつけて拓本をとってみたいり、様々な角度から観察した結果、無事に「彩淡蕙齋居士」の文字が浮かび上がりました。



入口先生作拓本→
「彩淡蕙齋居士」

2018年10月25日(木)

蕙齋の名前は、墓石正面の真ん中、ではなく、真ん中に彫られた名前の左側に刻まれていました。墓石の周囲一面にも名前が彫られており、没年を見ると蕙齋以下鍬形家の子孫のみなさんがここに眠っていることがわかります。最初に彫られたと思われる正面真ん中の名前は、蕙齋のお父さんではないでしょうか。

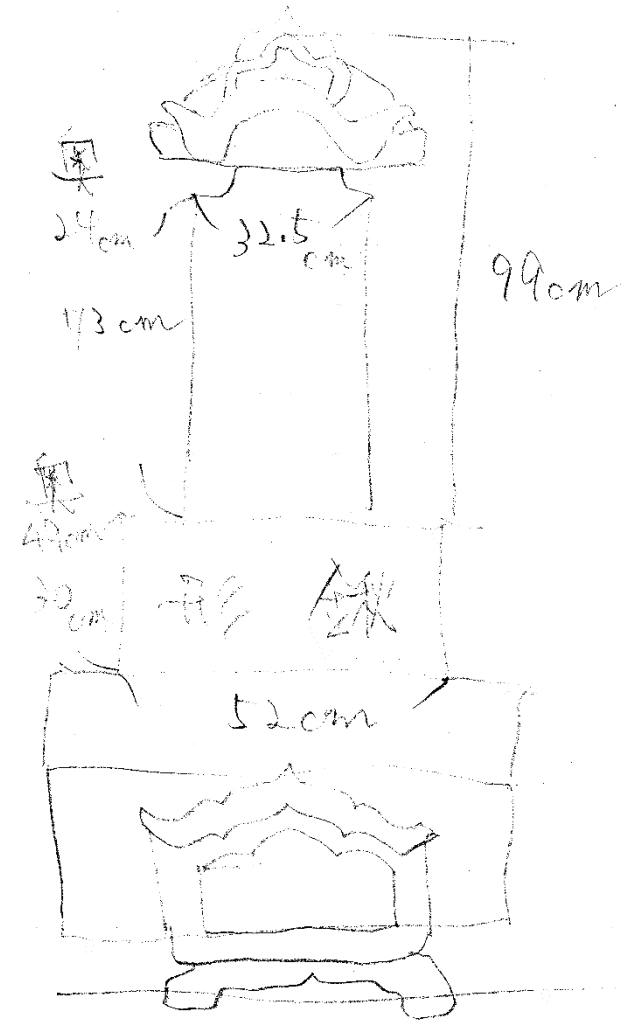
つまり、蕙齋がお父さんのために墓をつくり、その後鍬形家の子孫が同じ場所へ埋葬されたと想像できます³。

足を運んで観察したことで、蕙齋が先祖を大切にしていたこと、鍬形家が代々同じ場所で眠っていることなどが分かり、蕙齋という人を考える手掛りが、またひとつ増えたように思われました。



墓石の大きさを測らせて
いただく→

³ 過去帳は焼失しており拝見することが叶いませんでした。



入口先生筆
鍬形家墓のスケッチ↑

2018年10月25日（木）

3, お墓参りを終えて

「ようやく蕙齋に挨拶できて良かったです」と語っておられた山村さん。

山村さんが「ゆめみのえ」を創作しておられる様子を拝見していると、模写をしたりアニメーションとして動きを加えたりすることにより、蕙齋と対話なさっているように感じます。

今回のお墓参りで、どのようなことを語りかけておられたのでしょうか。

